

スウェーデンの福祉機器

高橋 義信

昨年11月、車いすに関する国際規格専門委員会および作業部会の日本代表としてスウェーデンを訪れる機会を得た。会議は6日間にわたり、ストックホルム市内のホテルで開催されたが、その会議の印象と、スウェーデンの福祉機器研究の中心的な活動をしているスウェーデン障害研究所(The Swedish Institute for the Handicapped)、市内に5ヶ所あるというテクニカルエイドセンター(Center for Technical Aids)のひとつおよび市内にある福祉機器常設展示場を見学したので紹介する。

1 国際規格会議

車いすに関する国際規格を制定するための会議で、ISO/TC173(リハビリテーション機器システム)/SC1(車いす)、WG1(試験法)、WG6(車いす拘束システム)などから成り、SC1の専門委員会は約2年に1度、またWGの作業部会はほぼ年間2回各国で開催されている。現在、Pメンバー16ヶ国、Oメンバー5ヶ国から成っている。

日本からは、日本車いす工業会代表のカワムラサイクル 嶋内田桂治氏と共に会議に望んだ。会議出席者はもう何年もこの作業をしてきた人が多く、互いに気心がわかり、本音の議論のできる環境と感じた。また、熱心な討議が行われ、夜7時すぎまで続けられた時もあった。

各国の代表は、それぞれの国の主要な研究機関や政府およびメーカーとの連携をとり、国としての意見をもって参加している。残念ながら、日本は国としての意見や対応をまとめて出席するような環境とはなっていない。

会期中のプログラムに歓迎レセプションや観光、施設見学なども計画されており、各国の人たちとの交流が持てた事は、私にとって大変有意義な事であった。

2 スウェーデン障害研究所

スウェーデンは、人口約850万人であり、23の地方政府に分かれている。スウェーデン障害研究所は、国レベルでの福祉機器のための中心的な組織であり、政府および地方政府連合が共同で運営している。

会議3日目の午後、市内観光のあと、ストックホルム市内よりバスで約1時間のところにある同研究所に案内された。

1968年に設立され、スウェーデンにおける最も有効な福祉機器を使用できるようにする事と、身体障害者に関する技術や、新しい知識をより優れた福祉機器の開発に利用できるようにすることを目的としている。

約110人の専門スタッフが調査・研究、開発、試験、情報・教育そして運営管理の5部門に分かれて働いている。具体的な作業のひとつとしては、各地方にあるテクニカルエイドセンターに対し、どのような機器を市場から調達すべきかのアドバイスを与える事である。研究所は、市場に出回っている各国の福祉機器を定期的にテストしている。

所内の見学は、車いす関係者ということで、車いす関連の研究、試験施設を中心に見学した。

車いすの試験機としては、繰り返し荷重負荷試験機があり、車いすのシート、バックレスト、フットレストなどに、空気圧により交互の負荷を与える装置である。また、各種の路面をシミュレートした10mの試験路上を、車いすに50kgの荷重を載せ、0.5m/secの速度で5000回の往復走行を行う走行耐久性試験装置(写真1)や、直進走行性試験装置が主なものであった。

国内の車いすメーカー数を尋ねたところ、4~5社であり、大きな所は2社とのことであった。化学研究室や自動車改造工場があり、全方向移動電動車いすに乗った障害者が自動車改造作業を行っていた。

見学後、歓迎夕食会が準備されており、持参した当所の車いす関連の写真にも大変興味を示してくれた。

3 テクニカルエイドセンター

ストックホルム市内に5ヶ所あるテクニカルエイドセンターのひとつで元ビール工場であったという建物の中にあるセンターを訪問した。このような所は全国で40ヶ所あり、各地方政府に最低1ヶ所はあると言う。

我々が見学したのは、車いす部門であり、10名の専門技術者と2名の職員が外回りをやっているとのことである。主な仕事は、身障者自身が使用する機器および介護者が使用する機器についてのアドバイスや使い方のトレーニングを行うと共に、使用者に合わせた改造や修理を行うことである。設備的には、工作機械室、木工機械室、溶接室、塗装室、縫製室など車いす製作のための設備を有していた。また、倉庫の中には、車輪、ハンドリム、キャスト、フットプレートやパイプ素材、レザー類などあらゆる部品がストックされており、在庫がなくなる前に補充し、ここでは、早ければ、その日のうちに自分に合った車いすができあがるとのことであった。

この点は、日本と大きく異なった供給システムを採用していた。また、不必要になった車いすも再生し使用している。

階下には、子供用から大人用まで各種の車いすが並べられ、価格が付けられていたが、もし、お金を払うとすればこの金額になると言う参考価格だそうである。ちなみに、この国では、全ての必要な福祉機器は無料で支給される。

30分間の約束が、2時間半も熱心に説明をしてくれ、さわやかな気分でセンターを後にした。

4 福祉機器展示場

ストックホルム市内にある常設の福祉機器展示場を覗いてみた。ここには専門の機器アドバイザーがおり、訪れる人に製品を見せながらアドバイスを行っている所である。広いスペースに車いすを始め、さまざまな福祉機器が展示してあった。

応対してくれた女性説明員は、大変ていねいにひとつひとつの製品を説明してくれ、我々に半日付き合ってくれた。

特に、私が興味を持ったのは、子供用車いすが多く開発されていた事である。重度の肢体不自由児も健常な子供が歩き始めるのと同じように、脳の発達をさせるためには、世界を広げて行く道具が必要であるとの考え方に基づくもので、子供用車いすの開発には力を入れているとのことである。遊びながら導入のできる3輪自転車、前傾姿勢をとるための素晴らしいデザインの訓練用車いす(写真2)、介助のための車いすや座位保持用車いすなど各種のものがあつた。

また、LOX と呼ばれる子供用電動車いすも展示されていた。

大人用車いすも各種の手動、電動が展示されていたが、座昇降型やスタンドアップ型がめだつた。車いす以外にも、入浴用機器、コミュニケーション機器、ベットやリフトなどの各国の製品が展示されていたが、残念ながら日本製品は見かけることができなかった。

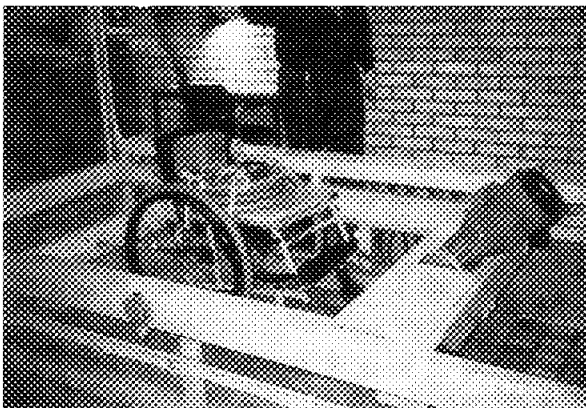


写真1 走行耐久試験機

5 全体の印象

スウェーデンは、福祉国家として名高い。その現場の一端を覗いて感じた事は、本当に、日本とは福祉に対する考え方が違うということである。

スウェーデンでは、ここ150年間、戦争を体験していないためなのか、全体に余裕が感じられ、障害のある人もない人も、全く同等の権利があり、なるべく同じ条件で生活できるよう、全員で考え実行している。全ての福祉機器は無料で支給され、ひとりの人が、ある状況下では、車いす等の同種類の機器を複数支給される場合もあるという。

市内では、斜行エレベータ、昇降に便利な傾斜バスや室内からのリモコン操作のできるリフト付き自動車などをみかけた。また、簡単な方法によってリフトを取り付けてあるものもあり、全てに金をかけるのではなく、エレベータは手動式が当たり前という合理性のある国でもある。

わが国では、機器を製作する技術はあると考えられるが、福祉機器は個別対応が多く、生産量も少ない事から、コマーシャルベースに乗らず、良い機器が開発されにくい現状である。一方、機器の使用技術、適用技術もまだまだ遅れている。

スウェーデンでは、この両方が福祉機器サービスシステムの中に組み込まれている現実を見た時、日本は、今後、相当の努力をしていかなければ、あのレベルにたどり着くのは困難と思える。

まずは、国民全員が同等の権利を持っているとの理解が最も大切であろう。

最後になりましたが、スカンジナビア三井物産㈱の山下健二氏に、大変お世話になりました。

(筆者は、技術研究所品質構造研究部主任研究員補)



写真2 子供のための訓練用車いす